

ままごと遊びにおける食に関するスクリプト(2) — 1歳時から3歳時までのスクリプト構造の縦断的变化

吉澤 千夏*・大瀧 ミドリ**

(平成19年9月28日受付;平成19年11月7日受理)

要 旨

幼児38名とその母親のままごと遊びを1歳時から3歳時まで縦断的に観察し、それらの結果を分析し、スクリプトの構造と特徴について以下の結果を得た。

- (1) 食べるに関するスクリプトでは、子どもの年齢的発達に伴うスロット間の有意な関連の増加により、スクリプト構造が複雑化する。しかしながら、飲むに関するスクリプトでは、子どもの年齢的発達に伴う類似の変化は認められない。
- (2) 食べるに関するスクリプトでは、子どもの年齢的発達に伴い、子どものスロットが占める比率、子どもが開始者となる比率が増加する。
- (3) 飲むに関するスクリプトでは、子どもの年齢的発達に伴い、子どもが開始者になるスクリプトで子どもが表出するスロット数が増加する。

KEY WORDS

make-believe play ままごと遊び, script スクリプト, mother 母親, 1-year-old child 1歳児, 2-year-old child 2歳児, 3-year-old child 3歳児, slot 表出スロット, longitudinal change 縦断的变化

1. 緒言

本報告は、1歳時から3歳時までの縦断データの比較分析により、幼児期の子どもの食に関するスクリプト⁽¹⁾の構造とそれに関わる母親の関わりを子どもの年齢的発達に伴う変化を捉えることを目的としている。

1歳時から3歳時までの食に関する表出スロットの縦断的变化について、子どもの表出スロットの項目数及び出現率は1歳時から2歳時にかけて増加すること、子どもの表出スロットの獲得においてはスクリプトの主要な表出スロットから社会的特徴を有する表出スロットへとという順序性があることが明らかになっている。一方、母親の表出スロットの項目数や出現率における子どもの年齢的発達に伴う影響は、食べる と 飲む に関するスロットでは異なること、母親は子どもが表出スロットを獲得した後、そのスロットの表出を控えることで、子ども自身がその表出スロットの自立的な行為者となるように配慮していることが示唆されている⁽²⁾。

このことから、1歳時から3歳時にかけて子どもの食に関する知識が増加し、それに伴い母親の関わりが変化することにより、スクリプト構造に変化がもたらされることが考えられる。そこで本報告では、1歳時から3歳時までのスクリプト構造の縦断的变化を捉えるために、3歳児とその母親のスロットの出現状況から想定される因果モデル⁽³⁾を本報告におけるモデルとして採用する。3歳児は既に主だったスクリプトを獲得していることが知られている⁽⁴⁾ことから、その3歳児のデータから想定される因果モデルを縦断データを用いて検証することにより、3歳時に至るまでにスクリプト構造がどのように変化するかを捉えることが可能となる。これらの分析により、以下の仮説を検証する。

仮説1：子どもの年齢的発達に伴い、子どもが表出するスロットの種類数が増加し、さらにスロット間が関係づけられ、スクリプト構造はより複雑になっていくであろう。

仮説2：子どもの年齢的発達に伴い、子どもはスクリプトを構成するスロットの表出者としての役割を増し、スクリプトの主要な担い手になっていくであろう。

2. 方法

2.1 研究対象

研究対象は、先行研究⁽²⁾と同様に、幼児(男児14名、女児30名)とその母親44組である。家族構成は、27家庭が核家族、17家庭が拡大家族であり、子どもが3歳時の母親の平均年齢は、30.9歳である。

2. 2 観察方法

観察期間は1999年4月から2001年7月である。原則として、対象児の誕生日の前後2週間以内に大学内の観察室で観察を行う。観察室の一隅に、ままごと道具、B型ブロック、大型バス各1セットを配置する。母子に、自由に遊ぶように教示し、母子の行動をビデオに録画する。

2. 3 分析方法

ビデオ映像をコンピュータ画面に取り込み、5秒単位の動画ファイルを作成する。分析対象は、母子のいずれかまたは両方がままごと道具に接触している場面並びにままごとに関する発話や行為が行われている場面である。母子3組の予備的観察の結果⁽⁵⁾から、延べ10回以上出現した38項目の表出スロットをメインスロットとして抽出し、「食べるに関するメインスロット (14項目)」「飲むに関するメインスロット (13項目)」「その他に関するメインスロット (11項目)」とする。なお、表出スロットの出現状況を明らかにするため、「自発」「受動」「自発受動以外」の3つの下位カテゴリーを設ける。

分析は、各ファイル画面を反復視聴し、各表出スロットの発現時間を記録する。記録者2名の一致率は、93.3%である。各表出スロットの発現時間をコンピュータに入力後、ダミー変数に変換し、統計処理を行う。なお、本報告では、母子における各表出スロットの出現の有無を問題としているため、同一の表出スロットが複数回出現した場合でも、1回の出現とみなして分析を行う。スクリプトの起点は、ままごと遊びのストーリーの開始時点で出現したスロットとし、終了時点で出現したスロットをスクリプトの終点とする。今回は、幼児の表出スロットの年齢的な変化とそれに関わる母親の表出スロットの変化を捉えることを目的とするため、母子それぞれに出現したメインスロットの項目数を合計し、その数が最も多いスクリプトを抽出し分析する⁽⁵⁾。

本報告では、年齢間の比較を一元配置分散分析により行う。有意差または有意傾向が認められる場合には、LSD法による多重比較 ($\alpha = .05$) を行う。

3. 結果及び考察

属性による影響が顕著に認められないため⁽²⁾、データを一括して分析を行う。

3. 1 パス解析によるスクリプトの構造化に関する分析

1歳時から3歳時までのままごと遊びにおけるスクリプトに関する縦断データの結果⁽²⁾に基づき、スクリプトの構造化について、仮説1及び仮説2を検証する。

1歳時から3歳時までのスクリプト構造の縦断的变化を捉えるために、3歳時における母子の表出スロットの出現状況から想定される因果モデル⁽³⁾に基づき、パス解析を行った結果を図1-1から図2-3に示す。本研究では、表出スロットの正の時系列的関係の形成を問題とするため、負のパス係数を持つものは扱わないこととする。

1) 食べるに関するスクリプトの構造化

食べるに関するスロット間の有意なパス係数は、1歳時は11個 (図1-1)、2歳時では19個 (図1-2)、3歳時では17個 (図1-3) 見出される。2歳時、3歳時は1歳時に比べて、1.5~1.7倍程度、有意なパス係数がみられる。

次に、有意なパス係数による時系列的関係 (以下、有意な時系列的関係と表記する) は1歳時では8種類、2歳時では15種類、3歳時では10種類見出される (表1)。

有意な時系列的関係を構成している表出スロットの項目数をみる (表1) と、1歳時では、表出スロットの項目数が最も多いものは4項目で構成されており、2種類みられる。ついで3項目で構成されているものが3種類、2項目で構成されているものが3種類である。2歳時では、表出スロットの項目数が最も多いものは6項目で構成されており、2種類である。5項目で構成されるものが4種類、4項目で構成されるものが3種類、3項目で構成されるものが4種類、2項目で構成されるものが2種類である。3歳時では、表出スロットの項目数が最も多いものは7項目で構成されており、1種類である。6項目で構成されているものが1種類、5項目で構成されているものが5種類、4項目、3項目、2項目で構成されているものがそれぞれ1種類である。表出スロットの項目数の平均は、1歳時は2.88 (SD=0.83)、2歳時は4.00 (SD=1.31)、3歳時は4.70 (SD=1.42) である。検定の結果、年齢の効果は有意であり ($F(2, 30) = 4.759, p < .05$)、多重比較の結果、1歳時よりも2歳時、3歳時の方が有意な時系列的関係を構成する表出スロットの項目数が多い。

食べるに関する有意な時系列的関係においては、有意なパス係数が1歳時から2歳時、3歳時にかけて増加する。また、表出スロット数も1歳時から2歳時、3歳時にかけて増加する。表出スロット同士を結ぶ有意なパス係数とスクリプトを構成する表出スロット数が増加することで、スクリプト構造がより複雑化することから、仮説1 (子どもの年齢的発達に伴い、子どもが表出するスロットの種類数が増加し、さらにスロット間が関係づけられ、スクリプト構造

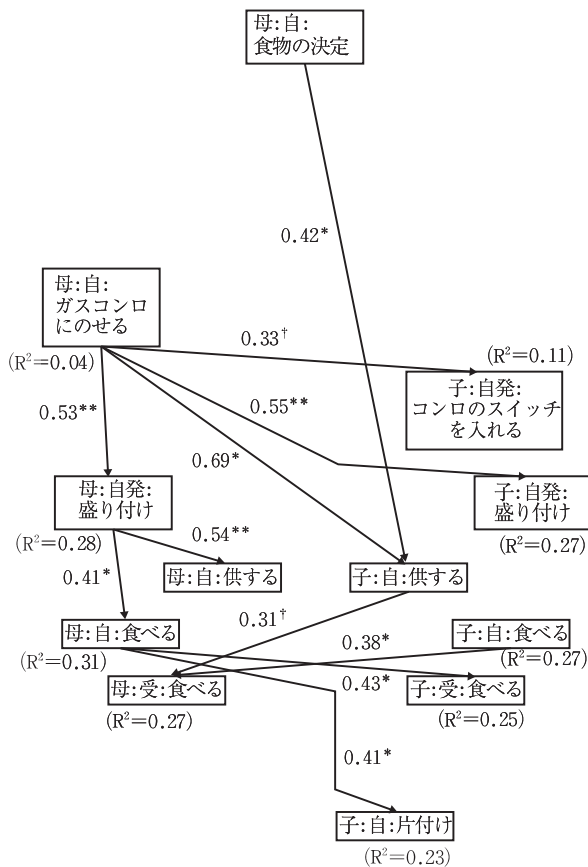
はより複雑になっていくであろう)が支持されることが明らかになる。

次に、有意な時系列的関係における母子の表出スロット数を見る(表1)と、子どもの表出スロット数が多いものは、2歳時、3歳時とも8種類であり、1歳時にはみられない。一方、母親の表出スロットが多いものは、1歳時では5種類、2歳時では4種類であり、3歳時にはみられない。また、母子の表出スロットが同数のものは、1歳時、2歳時では3種類、3歳時には2種類である。母子の表出スロットの割合をみると、子どもの表出スロットの平均比率は、1歳時では、33.3% (SD=17.25)、2歳時では48.8% (SD=22.98)、3歳時では61.0% (SD=8.73)である。検定の結果、年齢の効果は有意であり (F (2, 30)=5.039, p<.05)、多重比較の結果、1歳時から3歳時にかけて、子どもの表出スロットの比率が高くなる。

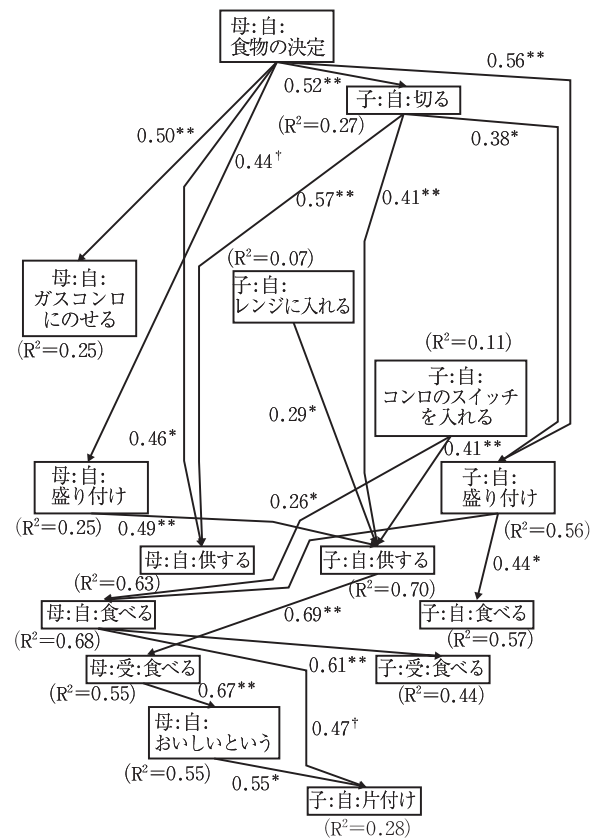
さらに、有意な時系列的関係の開始者が母子のいずれであるかをみる(表1)と、1歳時には、子どもは1種類であり、母親は7種類となっている。2歳時には、子どもが4種類、母親が11種類である。3歳時には、全て(10種類)子どもが開始者となっている。子どもが開始者であるものを1、母親が開始者であるものを0としたダミー変数による検定を行う。その結果、年齢の効果は有意であり (F (2, 30)=17.226, p<.01)、多重比較の結果、1歳時、2歳時よりも3歳時において、子どもが開始者となるものが多く認められる。

食べるに関する有意な時系列的関係において、子どもが表出するスロットの割合は、1歳時から3歳時にかけて増加する。また、子どもが開始する時系列的関係は2歳時から3歳時にかけて増加し、子どもの年齢的発達に伴い、食べるに関するスクリプトは子どもの表出スロットにより展開されることが明らかになる。このことから、仮説2「子どもの年齢的発達に伴い、スクリプトを構成するスロットの表出者としての子どもの役割が増し、スクリプトの主要な担い手になっていくであろう」が支持されることが明らかになる。

食べるに関する有意な時系列的関係における有意なパス係数及び表出スロット数は、1歳時から2歳時にかけて増加し、2歳時と3歳時の間では増加は認められない。これは、食べるに関する時系列的関係において、その関係を構成する表出スロット数やスクリプトの構造化は、1歳時から2歳時の間に転換期があることを意味している。しかし、母子の表出スロットに占める子どもの表出スロットの割合は、1歳時から3歳時にかけて徐々に増加することか



N=24
†p<.10 *p<.05 **p<.01



N=24
†p<.10 *p<.05 **p<.01

図1 1歳時の食べるに関するスロットのパスダイアグラム

図2 2歳時の食べるに関するスロットのパスダイアグラム

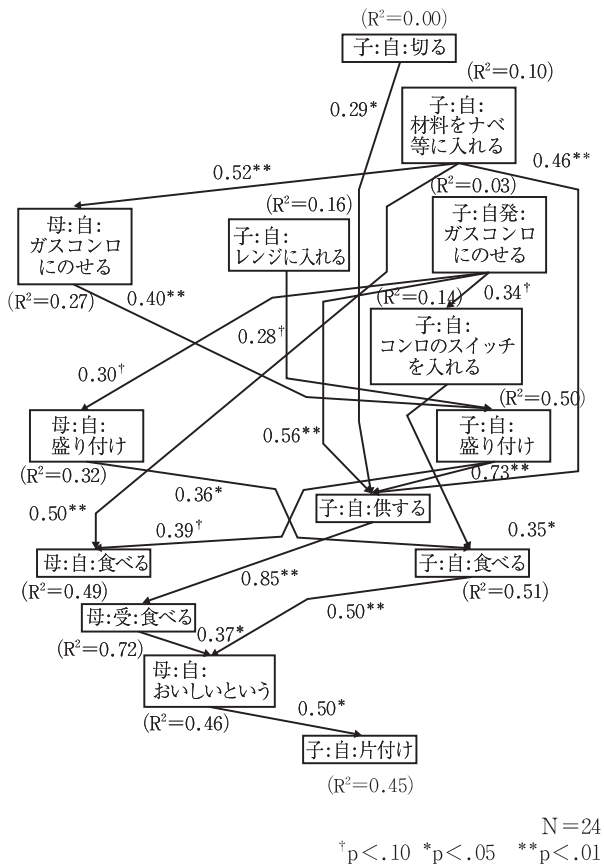


図3 3歳時の食べるに関するスロットのパスダイアグラム

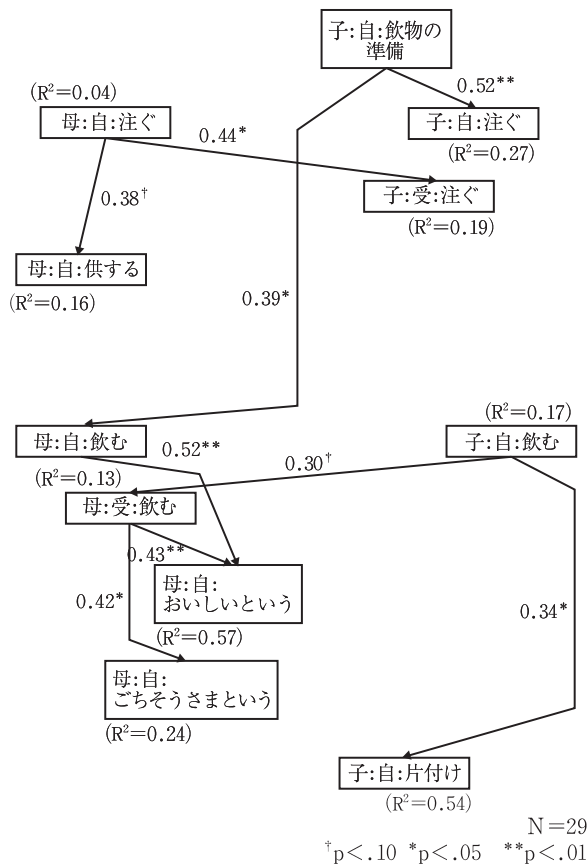


図4 1歳時の飲むに関するスロットのパスダイアグラム

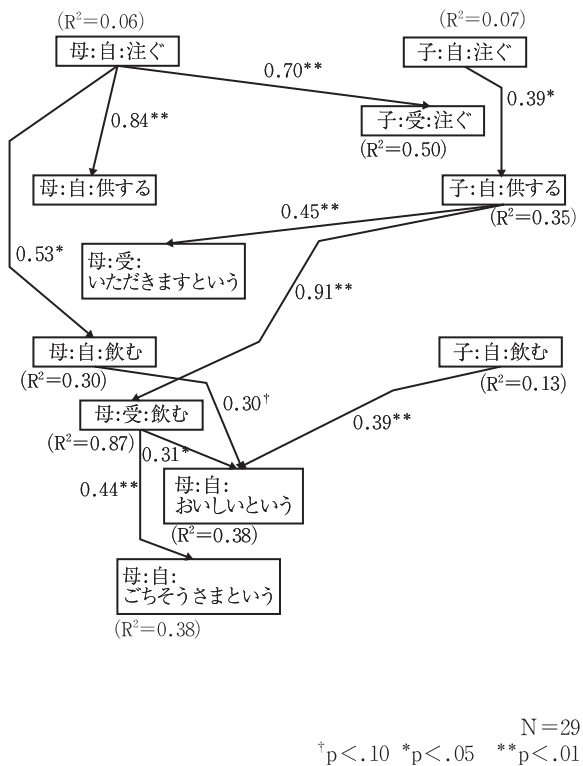


図5 2歳時の飲むに関するスロットのパスダイアグラム

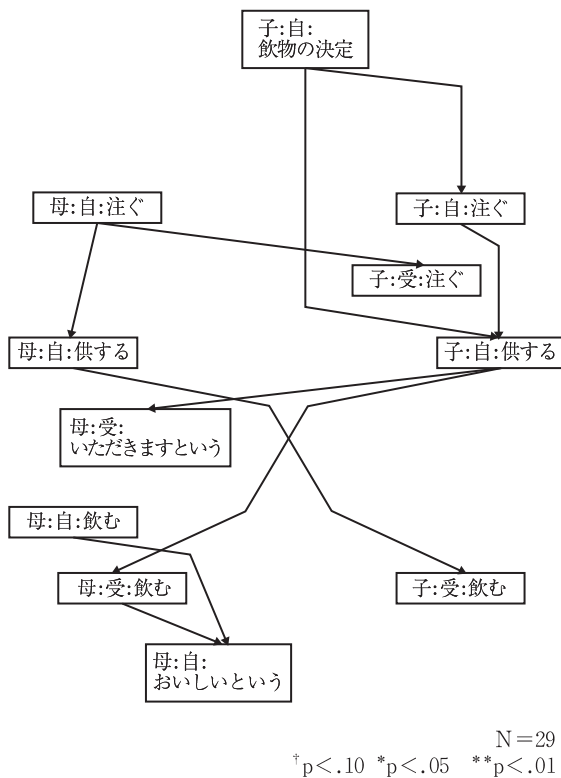


図6 3歳時の飲むに関するスロットのパスダイアグラム

表1 食べるに関する有意な時系列的関係

	1歳時	2歳時	3歳時
7項目			子：自：材料をナベ等に入れる 母：自：ガスコンロに入れる 子：自：盛り付け 子：自：供する 母：受：食べる 子：自：おいしいという 子：自：片付け
6項目		母：自：食物の決定 子：自：切る 子：自：供する 母：受：食べる 子：自：おいしいという 子：自：片付け	子：自：レンジに入れる 子：自：盛り付け 子：自：供する 母：受：食べる 子：自：おいしいという 子：自：片付け
		母：自：食物の決定 母：自：盛り付け 子：自：供する 母：受：食べる 子：自：おいしいという 子：自：片付け	
5項目		母：自：食物の決定 子：自：切る 子：自：盛り付け 母：自：食べる 子：受：食べる	子：自：切る 子：自：供する 母：受：食べる 子：自：おいしいという 子：自：片付け
		母：自：食物の決定 子：自：切る 子：自：盛り付け	子：自：材料をナベ等に入れる 子：自：供する 母：受：食べる 子：自：おいしいという
		母：自：食べる 子：自：片付け 子：自：コンロのスイッチを入れる	子：自：片付け 子：自：ガスコンロにのせる 子：自：コンロのスイッチを入れる
		母：受：食べる 子：自：おいしいという 子：自：片付け	母：自：おいしいという 子：自：片付け
		子：自：レンジに入れる 子：自：供する	子：自：ガスコンロにのせる 母：自：盛り付け
		母：受：食べる 子：自：おいしいという 子：自：片付け	子：自：食べる 母：自：おいしいという 子：自：片付け 子：自：ガスコンロにのせる 子：自：供する 母：受：食べる 母：自：おいしいという 子：自：片付け
4項目	母：自：ガスコンロにのせる 子：自：盛り付け 子：自：食べる 子：受：食べる	母：自：食物の決定 子：自：切る 子：自：盛り付け 子：自：食べる	子：自：材料をナベ等に入れる 母：自：ガスコンロにのせる 子：自：盛り付け 母：自：食べる
	母：自：ガスコンロにのせる 子：自：盛り付け 子：自：食べる 子：自：片付け	母：自：食物の決定 子：自：盛り付け 母：自：食べる 子：受：食べる	
		母：自：食物の決定 子：自：盛り付け 母：自：食べる 子：自：片付け	
3項目	母：自：食物の決定 子：自：供する 母：受：食べる	母：自：食物の決定 子：自：切る 母：自：供する	子：自：レンジに入れる 子：自：盛り付け 母：自：食べる
	母：自：ガスコンロにのせる 子：自：供する 母：受：食べる	母：自：食物の決定 子：自：盛り付け 子：自：食べる	
	母：自：ガスコンロにのせる 子：自：盛り付け 子：自：供する	子：自：コンロのスイッチを入れる 母：自：食べる 子：受：食べる	
		子：自：コンロのスイッチを入れる 母：自：食べる 子：自：片付け	
2項目	母：自：ガスコンロにのせる 子：自：コンロのスイッチを入れる 母：自：ガスコンロにのせる	母：自：食物の決定 子：自：ガスコンロにのせる	子：自：材料をナベ等に入れる 母：自：食べる
	子：自：盛り付け 子：自：食べる 母：受：食べる	子：自：供する	

■は、子どものスロットを示す。

ら、子どもによって主導的にスクリプトが構造化されるためには、時間を要することが示唆される。また、子どもが開始する有意な時系列的関係は2歳時から3歳時にかけて増加する。つまり、子どもの食べるに関するスクリプトの構造化において、1歳時は子どもの少ない表出スロットを有効に生かすために、母親が主導的にスクリプトを構造化する時期、2歳時は子どもの表出スロット数が増加しそれらを多く結び付けられるようになりつつも、スクリプトの構造化における母親の寄与がまだ大きい時期、3歳時は子ども自身の表出スロットにより時系列的関係が開始され、子どもの表出スロットが時系列的関係において大きな割合を占めるようになる子ども主導の時期であると考えられる。

3. 2 飲むに関するスクリプトの構造化

飲むに関するスロット間の有意なパス係数は、1歳時は9個(図2-1)、2歳時(図2-2)及び3歳時(図2-3)では10個見出され、年齢的発達に伴う有意差は認められない。有意な時系列的関係は1歳時、2歳時、3歳時ともに、7種類見出される(表2)。

これらを構成している表出スロットの項目数をみる(表2)と、1歳時では、表出スロットの項目数が最も多いものは3項目で構成されており、3種類である。2項目で構成されているものが4種類である。2歳時では、表出スロットの項目数が最も多いものは4項目で構成されており、2種類である。3項目で構成されるものが2種類、2項目で構成されるものが3種類である。3歳時においては、表出スロットの項目数が最も多いものは5項目で構成されており、1種類である。4項目で構成されるものが2種類、3項目及び2項目で構成されるものがそれぞれ2種類である。表出スロットの項目数の平均は、1歳時は2.43(SD=0.53)、2歳時は2.86(SD=0.90)、3歳時は3.29(SD=1.11)であり、検定の結果、年齢の効果は有意ではない(F(2, 18)=1.653, n.s.)。

以上の結果から、仮説1「子どもの年齢的発達に伴い、子どもが表出するスロットの種類数が増加し、さらにスロット間が関係づけられ、スクリプト構造はより複雑になっていくであろう」は支持されないことが明らかになる。

次に、有意な時系列的関係における母子の表出スロット数をみる(表2)と、子どもの表出するスロット数が多いものは、1歳時では2種類、2歳時では1種類、3歳時では3種類見出される。一方、母親の表出するスロット数が多いものは、1歳時では4種類、2歳時及び3歳時では2種類である。また、母子の表出スロットが同数であるもの

表2 飲むに関する有意な時系列的関係

	1歳時	2歳時	3歳時
5項目			子：自：飲物の決定 ：注ぐ ：供する 母：受：飲む ：自：おいしいという
4項目		子：自：注ぐ ：供する 母：受：飲む ：自：おいしいという	子：自：飲物の決定 ：注ぐ ：供する 母：受：いただきますという
		子：自：注ぐ ：供する 母：受：飲む ：自：ごちそうさまという	子：自：飲物の決定 ：注ぐ 母：受：飲む ：自：おいしいという
3項目	子：自：飲物の準備 母：自：飲む ：おいしいという	子：自：注ぐ ：供する 母：受：いただきますという	子：自：飲物の決定 ：供する 母：受：いただきますという
	子：自：飲む 母：受：飲む ：自：おいしいという	母：自：注ぐ ：飲む ：おいしいという	母：自：注ぐ ：供する 子：受：飲む
2項目	子：自：飲む 母：受：飲む ：自：ごちそうさまという		
	子：自：飲物の準備 ：注ぐ 母：自：注ぐ 子：受：注ぐ	母：自：注ぐ 子：受：注ぐ 母：自：注ぐ ：供する	母：自：注ぐ 子：受：注ぐ 母：自：飲む 母：自：おいしいという
	母：自：注ぐ ：供する	子：自：飲む 母：自：おいしいという	
	子：自：飲む ：片付け		

■は、子どものスロットを示す。

は、1歳時では1種類、2歳時では4種類、3歳時では2種類である。母子の表出スロットに占める子どもの表出スロットの平均比率は、1歳時では50.0% (SD=37.27)、2歳時では41.7% (SD=30.05)、3歳時では47.9% (SD=24.99) である。検定の結果、年齢の効果は有意ではない ($F(2, 18)=0.135, n.s.$)。

有意な時系列的関係の開始者が母子のいずれであるかをみる(表2)と、1歳時では子どもが5種類であり、母親が2種類である。2歳時及び3歳時では子どもが4種類、母親が3種類である。子どもが開始者であるものを1、母親が開始者であるものを0としたダミー変数による検定の結果、年齢の効果は有意ではない ($F(2, 18)=0.176, n.s.$)。しかし、子どもが開始者となる有意な時系列的関係に注目すると、表出スロット数の平均値は、1歳時では2.60 (SD=0.55)、2歳時では3.25 (SD=0.96)、3歳時では4.00 (SD=0.82) である。検定の結果、年齢の効果に有意傾向が認められ ($F(2, 10)=3.662, p<.10$)、多重比較の結果、1歳時よりも3歳時において、表出スロットの項目数が多い(1歳時<3歳時)。次に、表出スロットの構成状況を母子別にみる。子どもの平均表出スロット数は、1歳時では1.40 (SD=0.55)、2歳時では2.00 (SD=0.82)、3歳時では2.50 (SD=0.58) である。検定の結果、年齢の効果に有意傾向が認められ ($F(2, 10)=3.242, p<.10$)、多重比較の結果、1歳時よりも3歳時の方で、子どもの表出スロットが多い。また、母親の平均表出スロット数は、1歳時では1.20 (SD=1.10)、2歳時では1.25 (SD=0.50)、3歳時では1.50 (SD=0.58) であり、検定の結果、年齢の効果は有意ではない ($F(2, 10)=0.167, n.s.$)。このことから、子どもが開始者となる有意な時系列的関係における表出スロット数の平均値の変化は、子どもの表出スロット数に起因していることが明らかになる。

以上の結果から、飲むに関しても仮説2「子どもの年齢的発達に伴い、スクリプトを構成するスロットの表出者としての子どもの役割が増し、スクリプトの主要な担い手になっていくであろう」が支持されることが明らかになる。

飲むに関する有意な時系列的関係においては、有意なパス係数の数、表出スロット数、表出スロットにおける母子の割合、開始者が母子のいずれであるかについて検討した結果、いずれにおいても年齢による効果は認められない。このことから、飲むに関するスクリプトの構造化において、年齢的発達に伴う変化は認められないことが明らかになる。しかし、子どもが開始者である有意な時系列的関係に注目すると、構成する表出スロット数及び子ども自身の表出スロット数において、1歳時から3歳時にかけて増加することが明らかになる。先行研究⁽³⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾から、飲むに関するスクリプトの構造化は、食べるに関するスクリプトの構造化に比べて、その進展が早いことが示唆される。それゆえに、1歳時から3歳時までの有意なパス係数の数及び表出スロット数に変化がみられないものと考えられる。その一方で、子ども自身が開始者となる時系列的関係においては、1歳時から3歳時にかけて、自らの表出スロットを主導的に用いた時系列的関係を次第に構成出来るようになるものと考えられる。

3.3 食べる和飲むに関するスクリプトの構造化過程の相違点

上記の結果を踏まえ、食べる和飲むに関するスクリプトの構造化過程の相違点について検討する。

一般に、スクリプト化されていない新しい出来事は、ゴールに基づくプランによってスクリプトとして形成される⁽⁷⁾と考えられている。しかし、大人に比べて知識や経験が少ない子どもの場合は、ルーティン的な行為の連鎖を繰り返して行うことでスクリプトが形成され、それによってなぜそうするのか(プラン)を理解するようになり、プランが発展する⁽⁸⁾と指摘されている。本研究との関連でプラン、ゴールを捉えるならば、食に関するスクリプトにおけるゴールとは「食べる」「飲む」ことであり、プランとは「何を」「どのように」作れば、食べる・飲むことが出来るのかにあたり、「食物の決定」「飲物の決定」、調理や供給等のスロットが「食べる」「飲む」スロットと時系列的関係を形成することを意味している。1歳時の子どもにとって「食べる」「飲む」スロットの表出は、道具の社会的機能の獲得と関連し、ままごと道具に触発されて生起する行為である。その後、日常生活場面における観察や経験の増加、ままごと遊びにおける母親の関わりによって、子どもは食に関するルーティン的な行為の連鎖を観察・経験し、「食べる」「飲む」ことが他のスロットとの関連の中にあることを学ぶと考えられる。そして、ルーティン的な行為の連鎖が繰り返されることにより、「何を」「どのように」作れば、食べる・飲むことができるのか(プラン)が具体的に意識され、「何を」にあたる「食物の決定」「飲物の決定」や「どのように」にあたる調理や供給等に関するスロットが表出可能になると考えられる。また、ままごと初期の「食べる」「飲む」は道具に触発された単発的な行為であるため、器等に飲食物が入っていることは具体的には想定されていないと考えられる。これに対して母親は、器等の中に飲食物が入っているかのように振舞い、飲食物の命名(「食物の確認」「飲物の確認」：サブスロット)を行う等し、子どもの「食べる」「飲む」行為と器等の中の飲食物のイメージの仲立ちを行うと考えられる。さらに母親は、器等に飲食物を入れるためには「盛り付け」「注ぐ」が、飲食物を作るためには調理等が必要であることを日常生活やままごとの中で提示している。これを観察・経験することにより、子どもは「どのように」作るのかを獲得していくことが示唆される。そして最終的には、そのような調理過程を経る理由、つまり「何を」食べる・飲むのか

を子ども自身が想定するとともに「食物の決定」「飲物の決定」を行為の最初に表明し、その飲食物に適した調理や供応を時系列に沿って表出することが可能になると考えられる。このような過程を経て、子どもの食に関するスクリプトはさらに複雑化し、その後プランが発生することが示唆される。

また、本研究の結果から、食べるに関するスクリプトでは、母親による「食物の決定」が1歳時・2歳時のモデルに組み込まれるものの、子どもによる「食物の決定」がモデルに組み込まれることはない。一方、飲むに関するスクリプトでは、子どもによる「飲物の決定」が3歳時のモデルに組み込まれ、母親による「飲物の決定」がモデルに組み込まれることはない。このことから、スクリプト構造に子どもによる「食物の決定」が組み込まれていない食べるに関するスクリプトよりも、子どもによる「飲物の決定」が組み込まれている飲むに関するスクリプトの方が構造化の進展が早いことが明らかになる。さらに、この進展の違いについて考察すると、「食べる」「飲む」ことはいずれも、幼児期の子どもにとって日常的に慣れ親しんだ行為であるものの、子どもによる観察や経験には違いがみられる。「飲む」ことは乳児が最初に行なう摂食行動であり、比較的早い段階で自ら食具を用いて「飲む」ことを経験し、飲物を作る様子等を観察していると推察される。一方「食べる」ことは離乳期に開始され、実際に自分で食具を用いて「食べる」経験や調理場面等を観察する機会が「飲む」に比べて少ないと考えられる。このことから、幼児期の子どもにとって「食べる」は「飲む」に比べて新しい経験であると言える。また、「飲む」に関わる調理等は、ポットから注ぐ、レンジで加熱する等、比較的単純なものが多く、飲物の種類も一般にはジュース、お茶、コーヒー等、それほど豊富ではない。一方、「食べる」に関わる調理等は複雑であり、食物の種類も多岐にわたる。このような「食べる」「飲む」に関わる行為や飲食物の種類、それらに対する経験や観察機会の多少が、幼児期の子どものスクリプトの構造化に影響すると考えられる。故に、食べるに関するスクリプトよりも、経験や観察の機会が多く、行為や内容が比較的単純であると考えられる飲むに関するスクリプトの方が、子どもの獲得が早く、構造化の進展も早いと考えられる。

4. おわりに

ままごと遊びにおける1歳時から3歳時までの食べるに関するスクリプトでは、子どもの年齢的発達に伴い、スクリプト構造が複雑化し、さらにはスクリプトを子どもが主導的に展開するようになることが明らかになる。一方、飲むに関するスクリプトでは、有意な時系列的関係を構成する表出スロット数や子どもの表出スロットの割合、子どもが開始者となることには年齢的発達による有意な変化はみられない。しかし、子どもが開始者となる時系列的関係における子どもの表出スロット数が、年齢的発達に伴い増加することが明らかになる。

食べるに関するスクリプト及び飲むに関するスクリプトの構造化には違いがみられ、食べるに関するスクリプトよりも、飲むに関するスクリプトの方が子どもの年齢的発達に伴い早い段階で構造化されることが示唆される。このことは、「食べる」ことに関わる一連の行為よりも、「飲む」ことに関わる一連の行為の方が、子どもにとってより身近で、経験しやすいことが要因の一つであると考えられる。

今後は、生活文化としての「食」が、母子のどのようなやりとりの中で伝承され、獲得されていくのか、詳細な母子相互交渉の検討が必要である。

本報告は、兵庫教育大学連合学校教育学研究科に提出された学位論文の一部を加筆修正したものである。研究にあたっては、兵庫教育大学教授 松村京子先生に映像のパソコンへの取り込みに関する助言をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

引用文献

- (1) Schank, R. C. & Abelson, R. P. (1977) Scripts, plans, goals and understanding : An inquiry into human knowledge structures, Lawrence Erlbaum Associates., Hillsdale, NJ, 36-68.
- (2) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ (2007) ままごと遊びにおける食に関するスクリプト (1) - 1歳時から3歳時までの表出スロットの縦断的变化, 上越教育大学研究紀要, 26, 183-197.
- (3) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ, 松村京子 (2003) 3歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて, 日本家政学会誌, 54(2), 113-122.
- (4) Nelson, K., & Gruendel, J. (1986) Children's script. In K. Nelson (Ed.) Event Knowledge: Structure and Function in Development. Hillsdale, NJ: LEA. 21-46.
- (5) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ, 松村京子 (2001) 1歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて, 日本

家政学会誌, 52(2), 147-153.

- (6) 吉澤千夏, 大瀧ミドリ, 松村京子 (2002) 2歳児のままごと遊びにおける食に関するスクリプトについて, 日本家政学会誌, 53(6), 539-548.
- (7) Schank, R. C., & Riesbeck, C. K. (1981) 石崎 俊 (監訳) 自然言語理解入門. 1986. 総研出版.
- (8) Nelson, K., & Gruendel, J. (1981) Generalized event representations: Basic building blocks of cognitive development. In M.E. Lamb & A.L Brown (Eds.) *Advances in developmental psychology*, Vol.1 Hillsdale, NJ: LEA. 131-158.

Script structure regarding eating and drinking during make-believe play(2): longitudinal script-structure change till 1-years-old child becomes 3

Chinatsu Yoshizawa*, Midori Otaki**

ABSTRACT

Till the 38 1-year-old children became 3, 38 mother-child pairs were closely observed during their make-believe plays, the outcome was analyzed, and the following results were obtained regarding longitudinal change of script-structure.

(1) In the scripts regarding eating, the scripts structure become complicated, because the significant relations increase between slots along with the children's aging. However, in the scripts regarding drinking, the similar changes according to the children's aging are not admitted in the scripts.

(2) In the scripts regarding eating, both the child-slot rate and the rate of scripts initiated by child increased with child growth.

(3) In the scripts regarding drinking, the number of child slots in the scripts initiated by child increased with child growth.

*Ashikaga Junior College

**Division of Physical Education, Home Economics and Technology Education : Department of Home Education